

# 沼津市 山 ぶ 小 記念館

第12號

1994. 3. 1

編集・発行 社団法人 沼津牧水会

〒410 沼津市千本郷林1907-11

Tel(0559)62-0424

## 「詩歌時代」創刊のピラ

牧水の成し遂げた仕事については、その独特の生き方や言動を含め、極めて高い評価を受けている。が、晩年の「詩歌時代」出版については、もう一つ分らないところが多いように思う。牧水研究の第一人者であった大悟法利雄さんは、この出版事業を解説するとき必ず、牧水の「晩年の夢」という表現をする（「新研究」「歌人牧水」「牧水伝」。因みに「夢」を広辞苑でひいてみると「睡眠中にもつ非現実的な錯覚または幻覚。また覚醒中に起きる同様の状態」となっている。

「詩歌時代」は大正十五年五月に創刊号が出た。そして、同年十月には経営的な破綻を理由に、早くも終刊号を出している。僅か六冊で姿を消した華やかで短命な雑誌であった。余談になるが、終刊号では詩歌壇の「新人紹介」を特集した。その中で特に記録しておきたいのは、わが沼津における異色の文人、麻生鋭さんの名があったことだ。氏はこの号で生田春月の推薦により、本名恒太郎で紹介されている。確か二十代半ばのはずである。



「詩歌時代」創刊のチラシ

掲出の写真は、創刊に当たって直接の購読者を募るための勧誘広告のピラである。縦三十七センチ横三十五センチ、赤黒二色刷りの派手なもので、三万三千枚を郵送したというその一枚が牧水記念館に展示されている。

中央に牧水の文章で創刊についてのかなり声高な宣言文が入っている。曰く「小説にあらざる創作に非ずと謂ふが如き現文壇の風潮に嫌らず、茲に同志相謀り高貴にして有力なる月刊雑誌「詩歌時代」を創刊し以てこの偏寄せる悪流行を一掃せむとす」というもの。

さらにまた、「長詩短歌俳句民謡童謡散文詩の各詩型各流派を総合し、各派大家新進の作を網羅掲載すると共に、江湖一般に投稿を募り、往古万葉集当時にありし如き一大国民的詩歌時代を創始せむとす」などとあつて、まさに「夢」かと思まごう短詩型への限らない信頼と傾倒、その言立てがなされている。

しかし、大正十五年という年は牧水の描いた夢とはうらはらに、詩歌にとつての現実には苛酷なものに変わりつつあつた。雑誌発行の赤字に苦しみ、廃刊にしようかどうかと牧水がしきりに迷っていた七月はじめ、雑誌「改造」が「短歌は滅亡せざるか」という特集号を発行したのだ。この企画には斎藤茂吉をはじめ佐藤春夫、芥川龍之助、北原白秋など錚々たる論客が執筆しており、中でも釈道空の「短歌の前途を絶望と思わせる理由」についての細密な論評は、短歌円寂の宿命を示唆して歌壇に強い衝撃を与えたのである。

思えば、チラシの中で牧水が「一大国民的詩歌時代の創始」を高らかに歌い上げていた大正十五年春の終わりの頃、道空の方は苦しみながら「短詩型のもつ限界」とか「歌人の創作動機の無反省」「短歌批評の貧困」など、危機的文学の本質と正面から向き合っていたことになる。

この年、島木赤彦の死を契機に大正期短歌は終焉を迎え、反省期に入ったという説もある。こんな時、牧水の描いた「詩歌時代」への夢が急激に失速状態に陥ったのは、ある意味で当然のことだとも言えよう。短詩型に対する価値観のずれとか状況認識の甘さなど、牧水のもつ純真と危うさは、何よりも「牧水らしさ」の真髄でもあったのだ。

(上田 治史)

## 鈴木秋灯翁の逝去を悼む

中 尾 勇

若山牧水の生涯を語り続けて倦むことを知らなかつた鈴木俊一（秋灯）翁が九十三歳で平成五年十一月十六日に、牧水の待つ幽冥の世界に旅だたれた。先に、大先哲の大悟法利雄氏が幽界に去られていたので、牧水踏査に志すものとして、まさに痛恨の思いがある。

お通夜の時も林茂樹氏と献花をしながら、まぶたににじむものがあって、あの忘れたい俊一翁の遺影がかすんで仕方がなかった。

あの故人を惜しむかのような雨の十一月二十日の告別式の時も、俊一翁の心の友の鈴木芳子さんと献花をしながら、在りし日々の交遊のありがたさに心がしめり続けていた。

俊一翁は筆の早い人であった。牧水研究にうちこみ続けている私の二十六年間の間にどの位、お手紙を戴いたりお会いしたことだろうか。ご高齢の方の分厚い直筆の生原稿も「牧水の遺墨」「千本松原の歌碑遺聞」「牧水との最後の旅」「牧水の紺の脛当」などの十編余にもなる作品も戴いている。

牧水に関しての俊一翁に関係する記事なら、絶対といっていい位に、どんな些細なことでも、長文のお手紙を書かれて、訂正を求められて、私自身の牧水研究をより正確なものとして下さった奇特な人であった。

その真率で純朴な生き方が、牧水に愛されたゆえではないかと思う。新城町の金沢修二が牧水が言う「ルパシカ青年」なら、裾野市の俊一翁は、まさに「とりたてのジャガ芋のような青年」と若き日々

愛され続けた理由であると思える。

NHKで牧水の番組をくんだ時、企画を手伝った私は、沼津探訪では林茂樹氏、湯ヶ島では城所久夫氏、裾野市では俊一翁にお願いして出演をして戴いたが、この時の俊一翁の「裾野と牧水」の際は、私は出演をひかえたが、俊一翁に同行して、牧水を語る俊一翁の情熱の深さと、あふれるようなはずんだ若々しさにたまらない魅力を感じていた。

民放で「牧水の須山と十里木の旅」を収録した時は、鈴木芳子裾野市図書館長さんと俊一翁にお願いして、裾野市内をくまなく探訪して戴いて、いい番組になったと民放の人々に喜んでいただいたが、ご高齢だったその時の俊一翁の気骨と牧水にたいする敬慕の人生の深さにみずみずしさを感じて感動があった。俊一翁が私に書き送って下さった四百字詰め原稿用紙十枚に黒ペンでつづられた「牧水の紺の脛当」



鈴木秋灯さんと歌碑巡りの筆者と鈴木芳子さん、右端は須山清水館の野田定子さん(裾野市須山の牧水歌碑前で)

の文章の結びに、

「九月十九日、香貫山の山ふところの火葬場で牧水は荼毘にふされた。私は会葬者の群から独り離れて、師を焼く煙りをとめどなく出る涙の目で眺めて居た」と閉じられて、その後、次なる俊一翁の歌が書かれていた。

病重しの報らせに驚きかけつけし駅に中々汽車は来らず

枕元に座ればやあいつもなる笑ひ浮かぶる顔むくみたり

子を失ひし父なる我をねんごろにいたわり給ふ重きに

看護婦に盃を持つ手まねして尚酒ねだる見れば悲しき

癒へて後なすべきことをあれこれと語らう人に死は迫り居り

遂に逝く末後の水は水ならで師が何よりも好みたる酒

しみじみとひとり泣かんと庭に出づ庭にかすかな昼の虫の音

ねだられて我れの送りしこはぜある紺の脚絆を死の旅にはく

立ち登る師を焼く煙り眺めつゝ涙溢れてせんすべもなし

歌の善し悪しや、完成度を今は問わない。牧水物故後、牧水追慕の心で生き続けた七十五年間のこの人の心の総量が、しみじみと伝わってくる歌稿であった。俊一翁の残された業績と書かれた証言、そして語られた内容の総合化を私は必ずはからなければならぬと思いつつ、追悼のいたみをそのことの情熱と努力に変えようと心にさだめている。(牧水研究家)

# 第四回「中学生短歌コンクール」入選作品(平成五年度)

## 特選 (十首・十人)

ゴメンネと言えずに日々が過ぎていくたった一言難しく思う  
浮島中 嘉藤 清美

檜の木に登って見れば木が語る千年の歴史ここに感じる  
浮島中 木村 祐介

この雨の小さな雫木々に散り静かな午後の時が去りゆく  
浮島中 渡辺真紀子

貝がらに耳をあてれば思い出すはるか遠くの海の思い出  
第四中 渡辺 真樹

喜寿過ぎて孫にライバル意識もち張り合う楽しみ祖父の生ががい  
第五中 遠藤 大志

忘れまい別れを告げた祖父の死に約束すべし看護への道  
静浦中 伊藤 愛

戦争は何もうまないさ戦争は何ものこしてくれはしないさ  
長井崎中 山口 将典

台所にものをにてる母の背がどこかちよつぷり小さくみえた  
第二中 兼杉 奈保

ふと見ればかすかにはられたくもの巢に静かにつたう梅雨の雨水  
第二中 奥村 真以

忘れない輝く時間わけあつたさよならなんて言葉いらない  
第二中 鈴木 啓子

## 入選 (四十七首・四十七人)

夜遅く塾行く人を見かけるとそろそろ行くか迷うことあり  
浮島中 松田 晴久

友達が海へ行こうと誘うころ広い畑地で我汗流す  
浮島中 元杉 真也

退院の決まった父に母うれし笑顔の中の一筋の涙  
浮島中 柴田 真子

授業中窓の外から風が吹く快い風眠気をさそう  
浮島中 南 雅憲

老人の素敵な笑顔に感激し自分の人生見つめなおす  
(ポランティアの老人ホームにて)  
今沢中 石井 充子

夏休み毎朝やると決めただけ一日だけで終わったマラソン  
第四中 石田 有美

最終回最後の一球身にあびて土にしみこむ悔しき涙  
第四中 佐藤 高士

長雨で異常気象で大変だ日本どうなる米の問題  
第四中 竹村 太一

寝顔ならいつも無邪気でかわいい妹どうして昼間は憎たらしいの  
第四中 安住 幸恵

普通なら秋咲くはずのコスモスと共に咲く花夏の向日葵  
第四中 大嶽 真弓

おばあちゃん私の話聴くたびにやさしくゆれる銀色の髪  
第五中 青山 響子

亡き母の背中を思えば今もなお心に残る母のぬくもり  
静浦中 井出 恵美

波の音海に一面ひろがりて不幸の音幸せの音……  
静浦中 植松 加恵

雨が降り心の傷を流してと傘もささずに帰るこの道  
静浦中 森川 晶子

秋の風潮の香匂う浜辺よりときめく夏を今運び行く  
静浦中 大川 有未

ゴール前抜かれたことが悔しくて脳裏焼きつきふとんをかぶる  
静浦中 久保田訓弘

ひまわりの花のまちがい秋風にやっとお日様みつけてさいた  
長井崎中 楠 貴弘

泳げる日明日か明日かとまちわびてふと気がつく  
夏は終りか  
長井崎中 相田 拓馬

真冬にはこたつに入りねていたい子ねこのようにずつとねていたい  
長井崎中 小松 竜也

秋の空青くて深いその空にすいこまれていく私の心  
長井崎中 大木 康世

この夏を私はずっと忘れない私の机は秘密の箱  
長井崎中 渡辺悠希子

秋の空昼寝しながら見ているとなにかかない気持ちになつて  
長井崎中 伊海 政利

海の家仕事が終わる服をぬぎ言つてようだまた来年と  
長井崎中 小川 秀昭

歌うたうのどかれるまで大声でいやなことなど忘れるように  
長井崎中 真野奈央子

松原になぜかウサギがまよいでて何を思ふか耳を動かす  
第二中 宇佐美研介

台風のすぎざりし空青々と優しく語る雲が私に  
第二中 影山 圭子

成績の上がらぬ我をなくさめる心の奥は泣いている  
第二中 露木 友紀

母  
はんごうでけむりにおわれ目がいたみおこげのあじもたのしからずや  
第二中 高木 美穂

なつやすみあつくなかつた今年はねそれでも海にいつておよいだ  
第二中 大橋 道

片浜にワカシが回ってきたならば夏になったと思う  
第二中 大沼 巨人

このごろ  
にぎやかにみんな集まる夏祭りおなかにひびく火花の音が  
第二中 佐藤 宣子

せみの声うるさいけれどなぜか声がもう夏だよといつてる気がする  
第二中 古谷 智美

青い空太陽の下でひまわりが会話をしている『夏だねえ』って  
第二中 楠 房江

千曲川木々のこずえの影写し素足にしみいる水の冷たさ  
第二中 山田佳代子

夏風やすすしくあつく吹きあれてほたるの光ともきれいだ  
第二中 星 真人

夏祭りげたのは折れてカタカタと歩く私を笑う友あり  
第二中 宮本 優子

君を待つ夕暮れ時に見えしかな濡れては光るあじさいの花  
第二中 長谷川素笛

中三の大事な時期に遊ぶ時計の針が妙に気になる  
第二中 田中 英夫

白き花雨にうたれてます光かがやき見える夏のおが庭  
第二中 村田 佳代

北の地で香り漂うラベンダー広野の中は時間が止まる  
第二中 芹澤 晃

長雨で我が家の食卓物足りない時々食べるキャベツがうまい  
第二中 加藤 浩二

この夏は日にやけなくて妹の水着のあとの背中なつかし  
第二中 外山貴映子

夏祭り浴衣姿に砕け散る百匹の大蛇夜空に昇る  
第二中 杉山 明

窓につく小さなしづく手をつなぎ大きくなったら大地に戻る  
第二中 入戸野あいか

夜光虫真珠のようにキラキラと光り輝く夜の海辺に  
第二中 大木登紀子

夏休み受験生はかなしいぜ午前も午後も休むヒマなし  
第二中 植松 寛道

夏休み尾白の河に来てみれば清き流れに心洗わる  
第二中 芹沢 誠

## 選 後 評

コンクールには浮島中、静浦中、長井崎中、今沢中、第二中、第四中、第五中の七校から一人一首ずつ、六百四十八首の応募がありました。作品は全体に季節的なものを題材としたものが多く、それはそれで素直な気持ちのよいものでしたが、どうしても大同小異になりがちです。短歌は、もつと個人的に歌うこと、したがって特選作品のほとんどは、それ以外に題材をとったものとなりました。これからは日常的なものを多く題材として歌って欲しいと思います。夢やあこがれを題材にし、中学生らしい、素直な気持ちがよく表れた、ロマンチックな作品が目を引きましたが欲を言えば、自分が現在置かれている立場や生活の厳しさなど日常性をテーマにした歌がもつと歌われて欲しいと思いました。特選に選ばれた作品の中でも特に、祖父との日常を歌った作品や今は亡き祖父との約束を果たすべく看護婦の道へ進もうという自分自身を歌った作品などについては高く評価しています。(須永秀生)

## 文化講演 (牧水記念館会議室)

三月十九日(土) 午後二時

「恋愛と表現」

鈴木邦彦 (国立沼津高専教授)

## 牧水歌碑を探ねて

伊豆湯ヶ島温泉に、牧水は大正十一年三月二十八日から三週間滞在し、自然詠の代表作「山ざくら」二十三首を作っている。その中の五首が選ばれ湯ヶ島西平神社入口に昭和五十六年歌碑として建立された。当時、牧水はたびたび湯ヶ島を訪れ湯本館に泊まり天城屋酒店の六平さんら酒友達と陽気に酒を酌み交している。店通りに少し離れた所に天城屋(浅田英男)さんの自宅があり、その庭先に掲出の写真の歌碑が浅田一枝さんによつて建立されている。その歌詩は次のようである。

天城嶺の千年の老樹根をひたす  
真清水汲みて かますこの御酒



天城屋酒店の歌碑